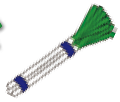
畑作

長ねぎ



○病害虫防除について

今年は気温と湿度が非常に高く推移し、軟腐病や白絹病が発生しやすくなっています。例年だと８月下旬から９月上旬にかけて残暑（猛暑）があるので早期防除に努めましょう!!

〈軟腐病〉

夏季の高温で多発。例年発生が見られる圃場では特に被害が心配される。

白絹病やネギアザミウマの傷口から軟腐病が感染する場合もあるので注意。

夏　ね　ぎ：収穫間際であれば、スターナ水和（収－７日）、ヨネポン水和（収－７日）、Ｚボルドー（収穫前制限なし）など

秋冬ねぎ：オリゼメート粒剤（収－30日）、スターナ水和、ヨネポン水和、Ｚボルドーなど

〈白絹病〉

地際の茎の周辺にクモの糸状の菌糸あり。茶褐色のツブツブ状が菌核。

25～30℃の高温、湿度が高い状態が続くと発生しやすい。土寄せ後に株元散布。

モンカット粒（収－30日）、モンガリット粒（収－14日）、ロブラール水和（灌注、収－14日）など

※また、気温が高いことで、ネギアザミウマの発生が多くなっています。病害と併せて防除を行いましょう。

山うど

○８月下旬以降は台風対策を万全に

① 高温多湿状態で株が枯れ上がります。

速やかに地表排水が行われるよう、明渠を掘ったり、排水路の点検を行ってください。

この時期に湿害にあった圃場の株は、伏せ込み後、腐りやすくなったり、揃いが悪くなるので排水対策はしっかり行って下さい。

② 強風による倒伏が考えられます。

摘心をまだ実施していないほ場のうち、茎長が１ｍを大きく超え、倒伏が心配される場合は摘心を実施してください。ただし、摘心が遅れると２次生長するおそれがあるため、８月下旬までには摘心して下さい。

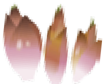
倒伏すると、茎の刈り取り作業がしづらくなったり、新芽が動いたり、伏せ込み時に手間がかかります。

③ 株が倒伏した場合は、引き起こしを行わないでください。

株の引き起こしにより再度株が動くと、新芽がさらに動いてしまいますので、注意してください。

※８月下旬以降の湿害、強風被害は収量に大きく影響します。万全な対策をお願いします。

みょうが



○収穫前防除と収穫作業の注意点

〈根茎腐敗病防除について〉

まだ収穫していないほ場では、収穫３日前までに使用できるランマンフロアブル500倍又は、オラクル顆粒水和剤2,000倍を３㍑／㎡（3,000㍑／10ａ）使用して下さい。

〈収穫時の注意点について〉

・きれいに水洗いした後、水切りをしっかり行い、柄を２cm以内に切りそろえて、切り口を乾燥させます。

・パックで出荷する場合には、１本６ｇ以上のものを太さを揃え、１パック当たり60ｇで出荷するようにして下さい。

・極端に色沢の悪い物、細い物、切り口が変色したものは出荷しないで下さい。

アスパラガス

○葉枯病・斑点病の防除について

先月まで湿度が高かったので、茎枯病や斑点病の発生が見られます。茎枯病に対しては、ロブラール水和剤を2,000倍にして散布、斑点病に対しては、ラリー水和剤を4,000倍にして散布してください。

また、両方の発生が見られる場合はアフェットフロアブルを2,000倍にして散布してください。合わせてネギアザミウマが出てくるじきになりますので、リーフガード顆粒水和剤やコルト顆粒水和剤の散布も行っていきましょう。

きゃべつ

○９月中旬までの管理について

８月中旬から８月下旬には、Ｓ646を10ａあたり20kg追肥し、軽く中耕しましょう。生育が悪い場合は、30kg追肥しましょう。外葉が小さいと収量が落ちるため、外葉を大きくするよう追肥は必ず行いましょう。

８月中旬以降は、定植前に使用したプレバソンフロアブル５などの効果が薄れてくるので、フェニックス顆粒水和剤により害虫防除をしましょう。また、病気の発生も懸念されるため、フェニックス顆粒水和剤と一緒に、バリダシン液剤５を混用して、散布しましょう。

９月上旬から９月中旬には、結球始期になるため、ＮＫ23号を10ａあたり20kgを追肥しましょう。９月上旬以降には、再度、害虫防除をしましょう。病気に関しては発生を見ながら防除しましょう。このころの薬剤は前日まで使える薬剤を使用しましょう。それ以外の薬剤を散布すると、収穫適期を逃してしまう場合があるので使用時期には特に注意しましょう。

畝間・株間の除草は徹底しましょう。

牡牛座（4・20～5・20）　レジャー運が活性化。気の合う仲間と遊びに出掛ければ、大いに楽しめます。クリエーティブな活動にもツキ